［第七話］

広瀬　淡窓

大分県日田市は、九州の小京都といわれる美しい町で、岐阜の長良川とよく似た三隈川（筑後川の上流）の清流は鵜飼の名所、温泉郷として有名です。

古い町並みの中心に、広瀬淡窓の生家・資料館があって、多くの観光客がおとずれます。日田は江戸時代に幕府の代官所があり、広瀬家はその御用をつとめる豪商でした。

淡窓は本名を建といいます。生まれつき体が弱く、病気のデパートといってよいくらい、たくさんの病気にかかりながら、かえってそれらを自分の学問や修養の糧としました。いわゆる「禍を転じて福となす」ことを実践した人です。

第六話の二宮尊徳と淡窓は、ほぼ同時代を生きた人であります。病弱な淡窓が頑健な尊徳よりも、五年ほど長生きしています。それだけ健康に留意し、養生に

つとめていたのでありましょう。

二十四歳で初めて「桂林荘」という塾を開き、門弟が次第にふえていきます。漢詩や詩吟に興味をお持ちの方ならばよくご存じの、「桂林荘雑詠」は淡窓の塾における師弟一如のうるわしい姿をうたったものであります。寝食をともにして学問に精進する、教育の理想の場がここにありました。

道うことを休めよ他郷苦辛多しと　同袍友有り自ら相親しむ
柴扉暁に出ずれば霜雪の如し　君は川流を汲め我は薪を拾わん

――故郷を離れて学ぶのは苦労が多いなどというのはやめよう。同じどてらを貸し借りして着るような親しい友もできたではないか。朝早く起き、柴のとびらを開けて外に出ると、霜が一面におりてまるで雪のようだ。さあ君は川から水を汲んでこい、私は山から薪を拾ってこよう、朝飯のしたくだ。

桂林荘が狭くなったので、移転して「咸宜園」と称します。咸宜とは「ことごとくよろし」と読み、英才も鈍才もみなそれぞれよろしいという意味のほか、身

分の上下貴賤を問わずみな入門してよろしい、との意味があります。

淡窓の「咸宜園いろは歌」のなかの一首、

「鋭きも　鈍きもともに　捨てがたし　錐と槌とに　使いわけなば」

人間には才能の鋭い者も鈍い者もいるが、どちらも適材適所で使えば、それぞれの力をじゅうぶん発揮する。つまり英才も鈍才もおのおの長所を生かせば、すべてよろしいのだというわけです。

教育者としての淡窓は、三千人からの弟子を育てました。あの交通不便な時代に全国から淡窓の学徳を慕って若者が集まったのです。いわば当時日本一の私立大学が咸宜園だったといえます。

淡窓の教育は、明治以降の学校制度や教育方法に、大きな影響を与えました。塾生にはその学力や人物の個性に応じて、全員に塾の仕事を分担させます。それぞれが、役割を通じて、学問以外の労作・他人のための世話・リーダーのあり方などを修業したのです。学問即実行の実学でありました。

第八話で述べる吉田松陰の「松下村塾」は、少数精鋭の塾風でしたが、咸宜園はまた対照的な塾で、総理大臣から文部次官・蘭学者・写真師の元祖など多彩多様な、偉才・鬼才ともいうべき人材を世に送り出したのであります。

安政三年（一八五六）七十五歳没

○　日田市は今でも不便なところです。先日も名古屋空港より福岡空港へ、そしてバスで一時間三十分かけて、日田市にある咸宜園に行ってきました。江戸時代に全国からの三千名もの弟子を育てたとは本当に驚きです。

○　英才も鈍才もみなそれぞれによろしいとは、安心のできる言葉です。社員一人ひとりの長所を生かさねばなりません。

（M生）